

冬山に入るプロセス

私が所属する県連盟主催の氷雪技術講習会の実技でのこと。4人テントで、「ガスコンロ一台、ガスカートリッジ二個で一泊二日をやりきる」という課題を出したことがある。雪を溶かして水を作り、食事を作ること、暖を取ることで、そして行動時には非常用のベーシック装備としても携帯することなどを限られた燃料の中でやりくりするには、ガスの使用量をにらんで献立、調理時間、使う水の量、テント内での過ごし方など、事前の準備やさまざまな工夫をする必要があるのだが、彼らの調理を見て慌てた。雪を溶かし、水を作り…まではよかったのだが、次の段階でなんと、彼らは「米」からご飯を炊きはじめていた。受講生が食糧の相談をした先輩は積雪期の経験がなかったらしい。水と燃料をできるだけ使わず、短時間で食べられるような食材をチョイスすることも課題のひとつとなる。彼らにメニューをまかせっきりにしたのが大失敗であった。カートリッジはまもなく空になる。明朝とその後の行動を考えて、燃料を残しておかねばならない。すぐにコンロを消させ、火の気のないテントの中で生ぬるい食物を口に運び、冷えたテントの中を温めることもせず、そのままシュラフに潜り込んだ。その夜の寒さといったら…。

今回は、冬山に入るプロセスについて考えてみる。

初歩的な失敗の体験は大切

「どうでした？」
実技を終えて稜線から降りてきた受講生に声をかけたならこんな返事が返ってきた。

「机上講座で、手袋だけではできないだけいいものを買え、と聞きましたが、実はなめてました。これくらいで十分だろうと勝手に判断して、これまで使っていたものを持ってきたんです。もう冷たくて冷たくて…降りたらもういいのを買います」

稜線でパーティーごとにテントを張った。ひとつのパーティーだけが誰も声掛けをしないまま、メンバーがてんでにテントを腰のあたりまで持ち上げてポールを押しこもうとしていた。見ていて、「おい、あそこ、折れるぞ」と、思ったとたん、強風を受けていびつに膨らんだテントのポールが折れ、設営不能になった。急ぎよ、メンバーを他のテントに分宿させることで対応したのだったが、あれが本番だったら、彼らはどうなっただろうか。

凍傷の一手手前、稜線でテントを失うことの恐ろしさ、こうした事例

をいくら机上で説明しても、自分その場で体験することに遠く及ばない。

雪を探して

「大日は降ってるみたいですよ。あそこでウチの会は毎年雪訓やってるんですけど」

昨年の氷雪技術講習会のこと、直前になってそれまで実施してきた実技山域の情報が集まってきた。中央アルプスの宝剣岳周辺には道路工事中でバスが不通で入れない。御岳には雪がないし噴火の影響で登れない。西穂高岳はロープウェイが点検修理中だ。全滅じゃないか！が、できることなら、中止にも延期にもしたくない。両白山地・大日岳の麓のスキー場は、三日前まではまったく雪がなかったのに、人工雪を造りはじめたとたん、大雪になったらしい。で、急ぎよ山域を大日に定めて入山したのだったが、当日は道路の除雪が間に合わず、初滑りに来たスキーヤーたちの車がスタックして渋滞。やっとのことでゲレンデに到着し、最上段までリフトを利用して上がったものの、一歩スキー場の脇に

私の登山

21

ワタシと登山

半田ファミリー山の会代表
洞井 孝雄

どんな山がやりたいんだ？

出ると胸までの新雪。リフト乗り場から、いつもなら10分もあれば登っている地点まで、ふわふわの雪をかき分けて20数人が登り切るのに1時間半以上もかかってしまった。積雪ゼロのゲレンデに二日で降り積もった120cmを超える新雪では、キックステップもアイゼンワークもピッケルワークもあつたものではなく、ラッセルと雪中の幕営生活、スノークラフトに終始した実技になってしまった。

30年前には11月中旬には氷雪技術

講習会の実技が可能だった。10月から氷雪技術を理論学習し、11月に実技で冬山の入り口に立ち、年内はトレーニング期間、そして年末年始の合宿で冬山本番というように、雪の便りを聞くころから厳冬期まで、知識も技術も、手順をきちんと踏んで冬山に入っていくことができた。今では、地球温暖化、世界的な異常気象、これまでの季節の移り変わりも天候の変化も、歳時記通りにはならず、雪が降るべき時期に降ってくれないことが多くなった。12

月になっても積雪がなくて、状況を変え、日程をずらしても、ある年には、申し訳程度の雪と土ほこりの中のアイゼンワークやロープワークになつたり、ある年には降雪とホイイトアウトの中を命からがら逃げ下ってきたり、雨でびしょびしょの雪の中で行動技術の反

復練習をしたり、前述のように新雪ばっかりということもある。氷雪技術の実技を過不足なくおこなえる条件が整う年はめったにない。こうまでして実施する意味があるのか、と思うこともないわけではないが、各会での冬山本番のあとに、冬山の入り口に立たせる講習会をやってもあまり意味がない。この講習会の実技の中での失敗や実体験は、本番を前に、無雪期とは違う条件の中でいかに動くか、過ごすか、そして生き延びるか、という冬山の

基本を学び、身につけるための大事な機会である。いきなり厳冬期！ではちよつと困る。やはりまず実技を体験したうえで、トレーニングや準備を積んで合宿という手順が望ましい。で、毎年この時期に雪と追いかけてこをすることになる。が、そろそろ、これまでのスケジュールでは間尺に合わなくなつてきている。冬山へのアプローチのための新しいプロセスを考えることが必要な時期なのだが…



ラッセル



雪を踏み固めてなんとか…

冬用登山靴

今はウインターブーツと呼ぶらしい。冬用登山靴が山道具ショップの店頭で並んでいる。高価格であるという共通点を除けば、国産も製造元もメーカーの商標も仕様もチョイスするのに悩むほどさまざまなものが出回っている。最近の冬用ブーツはより軽く、温かく、足にやさしく、ハイスペックになってきているが、いまだにプラスチックブーツへの思いが強い。加水分解、経年劣化によって突然バラバラに壊れる事例が相次いだために、ほとんど店頭から姿を消したが、防水性、保温性、利便性の点で優れていた、と思う。テント内での生活はアウトブーツを脱いでインナーブーツで事足りたし、凍る心配もなかった。下山してからほとんど手入れ不要だったのもありがたかった。80年代に出現したときには、その軽さに感動したものだったし、靴の形状の自由な成型はアイゼンの着脱を確実・容易にし、現在のようにアイゼンそのものや装着金具やバンドの進化をうながしたようにも思う。私にとってプラブーツは30年近く国内外の雪の山の強い味方だった。残念ながら、手元にはもう一足もない。できれば、ハイスペックでリーズナブルなプラブーツができないものか、そんなことを思っている。